

Hukutana

No. 11 (July 1999)

The Bulletin of
Japan Society for the Promotion of Science,
Research Station, Nairobi



ふくたーな

第11号 (1999年7月)

日本学術振興会
ナイロビ研究連絡センター
ニュースレター

- 木村李花子 1 シマシマ幻影 - Grant's zebra and Grevy's zebra -
KIMURA Rikako Illusion of stripes - Grant's zebra and Grevy's zebra -
- 3 第136回学振セミナー
136th JSPS Seminar
- 4 センター往来
Visitors
- 5 センター行事
Meetings, News
- 高野 俊一郎 5 はじめまして Hujambo?
TAKANO Shun'ichiro Self Introduction
- 6 編集後記
Editor's Note

Ethology

シマシマ幻影 - Grant's zebra and Grevy's zebra -

木村李花子

[名古屋大学大学院生命農学研究科 / 馬の博物館]

ウマ属には、2つの社会形態が存在します。1つは、1頭の雄が複数の雌と長期間家族群を形成し、群れを持たない雄は流動的な雄の群れを作る『群れ型』。これには、家畜馬の原種の1系統と考えられているモウコノウマ、南アフリカの山岳地に生息するヤマシマウマ、東～南アフリカに広く分布するサバンナシマウマが相当します。2つめは、雄が広い縄張りを持ち、そこにやってくる雌と交尾をし、縄張りをもてない雄は流動的な雄群れを作る『縄張り型』です。これには、ケニア、ソマリア、エチオピア、スーダンの半砂漠～ブッシュの多い平原に生息するグレビーシマウマや、砂漠地帯に分布するアフリカノロバ、西アジアからモンゴルにかけて分布するアジアノロバがあてはまります。

ケニアのバッファローズプリングス国立保護区は、野生下でのGrant's zebraとGrevy's zebraを同所でみることのできる、貴重な場所です。ここでは、Grant's zebraの生息環境としては、最も雨が少なくブッシュの多い乾燥したサバンナに生息する集団と、Grevy's zebraの生息環境としては最も湿潤なサバ

ンナに生息する集団とが共存しているのです。川を挟んだ反対側のサンプル国立保護区の乾燥地帯では、縄張り型社会を形成しているグレビーシマウマですが、バッファローズプリングスでは異なる生態を示しています。つまり、乾季(8月)には水場の近くに50～100頭にも及ぶ複雄複雌の巨大混合群を作りますが、雨季(5月)には解体し、規模を小さくした混合群や、単独雄、雌と子供のみ群れ等を作っていました。まさに、『縄張り型』と『家族群型』の中間の様相を呈し、キイロヒヒの作る社会形態に似ていることが解ってきました。彼らの社会形態がいかに自然環境に起因しているかを知る上で、格好のこれらの集団を対象に、さらに匂いづけ行動、相互グルーミング行動などのコミュニケーション行動を比較するためのデータ収集を行ってきました。

「グレビーシマウマとGrant's zebraにおけるコミュニケーション行動の比較」と銘打った調査も、昨年の乾季に続いて今回の雨季の調査で終了、成果をまとめなければならない。5月5日～12日、動物行動学を専

Milima haikutani, lakini binadamu hukutana
山と山は出会わないが、人は出会うものだ (スワヒリ語のことわざ)
Mountains never meet, but human beings do - Swahili proverb

攻める学生、ナチュラリスト、写真家からなる日本人4人の1行は、サンプル及びバッファローズプリングス国立保護区に入った。勤め人のため、調査期間はぎりぎり最低の日数しかとれない。1日の無駄も許されない。

調査方法は、数頭の個体を識別し、一定の時間同じ個体を追跡する方法をとっている。運転手兼ガイドの3人は、いつもと勝手がちがって少々お疲れ気みである。道路以外の所にも侵入できる許可もやっと得られ、4WD車で岩だらけのブッシュ地帯に分け入る。やや神経質なグラントシマウマの機嫌をそこねない様に、車はしのびよりエンジンをきる、と思うとまたシマウマが動くのでエンジンをかけまたしのびよる。朝から夕方まで、休みなしでこのくり返し。夕方には無線で、「ピアクニウワモジャモジャ」と、つぶやきあうのもごもっとも。こちらも、同じ柄をもつ個体はいないといわれながらも、縞柄頼りの個体識別はやはり過酷である。まぶたを閉じてシマシマの幻影が見える。特にグレイビーの縞は細く間隔が狭いので、特徴をつかむのに緊張感がともなう。早く特徴をつかまないと。彼等はじっとしていない。数頭分の縞が混ざりあい、ど

れがどれやら混乱が混乱をよぶ。いらつく。暑い。カメラマン以外、3人とも皆下痢気味だ。「ひえびた」を項に貼り遠のきそうな意識を取り戻す。

ガイドの中でも、動物に詳しいオクボ氏の視力と、シマウマを見分ける能力は素晴らしい。近眼で眼鏡をわすれてきたと言いながら、8倍の双眼鏡とほぼ同じ視力である。これが近眼というものなら、コンタクトレンズをし双眼鏡を覗いているにも拘わらず、いつまでも発見できない私はめくらである。1頭で行動するグレイビーシマウマの雄を走る車からの確にみつける。彼なしではこの調査はなりたたなかった。ドライバー同士の無線に、日本語と怪しいスワヒリ語が混じっても意に介せず使用させて下さった、ドライバーネットワーク上の皆さんに心より感謝致します。

調査の安全性を確保していただいたKWSイシオロ支局のルヒウ氏、調査法方法で無理を聞いて下さった両保護区のワーデン、また調査許可の申請等を行って頂いた学振の足達さん巻島さんにこの場を借りてお礼申し上げます。



Illusion of stripes -Grant's zebra and Grevy's zebra-

KIMURA Rikako

(Graduate School of Bio-Agricultural Sciences, Nagoya University / Equine Museum of Japan)

My three colleagues and I have continued our research, titled "A comparative study of communication behavior of Grant's zebra and Grevy's zebra" in Samburu and Buffalo Springs National Park from last year.

The drivers supporting us always looked tired, due to the continuous starting and stopping of vehicles to follow zebras, which is quite different from their common game drive. They said every evening "Bia kunywa moja moja" through the radio after their hard work during the day.

We were quite tired also, because the identification of individual zebras through their

stripes brought us illusions of a zebras' image. Narrow and fine stripes of Gravy's zebra put us into great confusion. Hot wind, zebra's images, diarrhea irritated us all.

Mr. Okubo helped us a lot with his splendid vision, which is comparable to ours with 8x binocular. He could find a single male Gravy's zebra even from a running car, though he said he forgot his eye glasses.

I thank Mr. Ruhui in Isiolo station, KWS, and the wardens of Samburu and Buffalo Springs National Reserve.



English summary by the Editor

行事

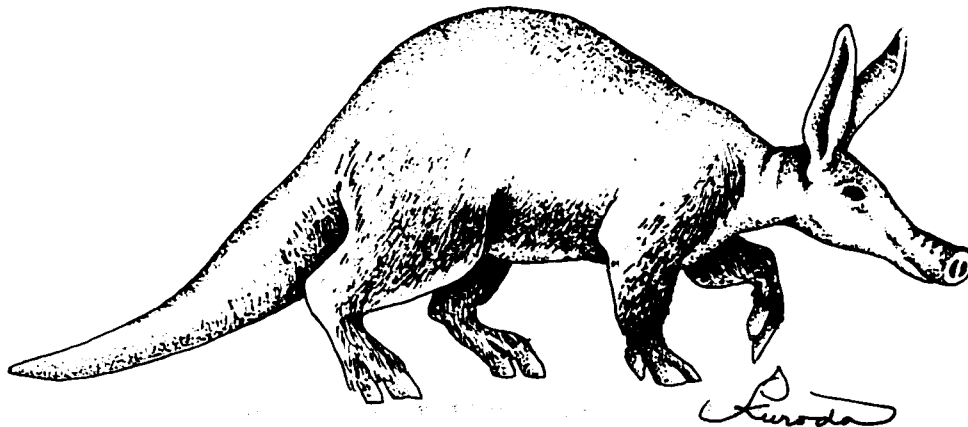
第136回学振セミナー

話手: アフリカ自然誌研究会 黒田弘行
演題: 「哺乳動物」を楽しむ
場所: 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター
日時: 1999年7月10日(土) 14時~16時
言語: 日本語
参加: 31名

過去2年間は日英2言語で行われてきた当セミナーですが、今回は日本人を対象に、発表・質疑応答は日本語のみで行いました。

生物としての脊椎動物と哺乳類の特徴の概観、インバラやガゼルがシカではなくカモシカと同じくウシの仲間であること、などの解説。次に長期にわたって撮影されたスライドを上映していただきました。ライオンの家族、大型から小形までのカモシカ各種、ヌーの大移動など、長期の観察をもとにした説明は、上滑りの理論ではなく、迫力のあるものでした。

登場した動物は霊長類から食肉類、偶蹄類、長鼻類、最後に管歯類(ツチブタ、挿絵)と広範囲でした。



136th JSPS Seminar

Speaker: KURODA Hiroyuki, African Natural History Society
Title: Enjoying "mammal"
Place: JSPS Research Station, Nairobi
Date: 10th July 1999 (Saturday)
Time: 14:00 to 16:00
Language: Japanese
Participant: 31 persons

センター往来 Visitors

6月 June

- 7 秋吉博之 AKIYOSHI Hiroyuki (神戸大学大学院 Kobe Univrsity)
- 8 Okute Kodhek
- 14 Nasser Malit (National Museums of Kenya)
- 13 坂井紀公子 SAKAI Kikuko (京都大学大学院 Kyoto Univrsity)
- 15 Waita Sebastian (University of Nairobi)
- 17 高野俊一郎 TAKANO Shun'ichiro (神戸大学大学院 Kobe Univrsity)
- 19 Ambrose Ichom (Egerton University)
- 19 Daniel Odhiambo (National Museums of Kenya)
- 22 Frederick Karanja (National Museums of Kenya)
- 22 Susan Owiro (National Museums of Kenya)
- 23 石田宗俊 ISHIDA Munetoshi (在ケニア日本国大使館 Embassy of Japan)

7月 July

- 7 Karen Johnson (National Museums of Kenya)
- 12 Korobe Bonface (University of Nairobi)
- 14 吉田未穂 YOSHIDA Miho (東京都立大学 Tokyo Metropolitan Univeristy)
- 14 Jin-Hee Cho, 清水俊博 SHIMIZU Toshihiro,
小竹明夫 ODAKE Akio (United Nations Centre for Regional Development)
- 14 鹿野一厚 SHIKANO Kazuhiro (島根女子短期大学 Shimane Woman's College)
- 20 湖中真哉 KONAKA Shin'ya (静岡県立大学 University of Shizuoka)
- 20 黒江健一 KUROE Ken'ichi (IOS Afric)
- 21 中務真人 NAKATSUKASA Masato, 高野智 TAKANO Tomo,
芝田純也 SHIBATA Sumiya, 国松豊 KUNIMATSU Yutaka
(京都大学 Kyoto University)
- 22 John N. Kariuki (National Animal Husbandry Research Centre)
- 23 竹村重和 TAKEMURA Shigekazu (Kenya cience Teachers College / JICA),
石田博幸 ISHIDA Hiroyuki (愛知教育大学 Aichi University of Education),
植田敦三 UEDA Atsumi (広島大学 Hiroshima University)
- 23 岸田信高 KISHIDA Nobutaka (Trans World Minerals)
- 23 太田至 OHTA Itaru (京都大学 Kyoto University)
- 23 横山一郎 YOKOYAMA Ichiro (IOS Afric)
- 26 宮本律子 MIYAMOTO Ritsuko (秋田大学 Akita University)
- 27 大塚和夫 OTSUKA Kazuo (東京都立大学 Tokyo Metropolitan University),
菊地滋夫 KIKUCHI Shigeo (明星大学 Meisei University)
- 27 石田英実 ISHIDA Hidemi (京都大学 Kyoto University)
- 28 作道信介 SAKUMICHI Shinsuke (弘前大学 Hirosaki University)

センター行事 Meetings, News

6月16日：研究者の調査地視察のため Kerugoya 訪問

7月1日：研究者の調査地視察のため Kiboko および
Machakos 訪問

7月2日：邦人緊急移送、連絡手段の確保について JICA
宮川昌明氏と会談

7月5日：Institute of African Studies, Univeristy of
Nairobi の Kolette Suda 所長と日本、ケニアの学術
交流の推進について会談

7月5日：ケニア国立博物館の教育部長 Frederick
Karanja 氏と科学教育のあり方について会談

7月10日：第136回学振セミナー開催（詳細3頁）

7月28日：短期派遣研究員の弘前大学助教授、作道
信介着任

7月31日：研究者の調査地視察のため Kisima 訪問

はじめまして Hujambo? Self Introduction

高野俊一郎 TAKANO Shun'ichiro (神戸大学農学部 Kobe University)

初めまして。神戸大学の昆虫科学研究室から ICIPE
に半年間預けられている高野です。今、修士1年です。
研究テーマは牛などの家畜に寄生するダニに寄生する
ハチについてです。ハチはともかくとしても、このダ
ニが見ていてなかなかおもしろいのです。このダニは
吸血する前は結構歩くのが速いのです。そして、その
姿は「天空の城ラピュタ」というアニメの最後の方で、
ロボット兵がわらわらとまるびでてくるシーンがある
のですが、その時四つん這いになったロボット兵の動
きに実によく似ています。昆虫は結構足の関節がはっ
きりしているので、かくっかくっとなっていますが、

ムカデとかダニとか多関節のやつらは、どうもきっぱ
りしない足の動きをします。子供が描いた人間の絵で、
関節がはっきりせず、あらぬところで腕とかが湾曲し
ているというのがよくありますが、あんな感じです。
しかも、体の横に足がついていて、(昆虫ってだいた
い一応下側というか腹側についてると思うのですが)
なんだかアニメチックです。

今年は11月の終わりまでケニアにいます。まだ、
ほとんどどこにも行っていませんが、これから色々な
ところに行ってみたいと思っています。

編集後記

◇短期駐在員として着任しました、作道です。一家郎党4名です。専門は社会心理学・医療人類学。北西部トゥルカナで「病気になったらトゥルカナはどうしているのか」ということを調べています。トゥルカナの病気対処では、病気の説明や解釈はあまり重んじられません。病気は、それをどのように考えようとも、なるようにしかならないと考えているようです。僕たちはつい医療によってなんでも治療できると考えてしまい、彼らの対処を“おくれた”と見なしがちです。しかし、僕は、トゥルカナの対処法に、病いへの基本的な姿勢を見えています。そしてそれは、一見解釈や説明豊かな、健康主義(healthism) 国・日本を理解する基本にもなります。過去4回ケニアに来ています、そのたびに歴代の駐在員の方にはお世話になりっぱなしでした。少しでもみなさんのサポートができれば幸いです。(作)

◇夏休みに入り、訪問する研究者が増えました。ケニアでの調査を円滑に進められるよう支援するのが最大目標と掲げて業務を進めておりますが、いかがでしょうか。◇嵐のようにケニアに入り、疾風のようにケニアを去っていった木村李花子さんには、調査の一風景を書いていただきました。Ethologyは本ニュースレター初の登場です。◇新機軸を考えるのが好きな駐在員としては、次は何をしようかと思案の毎日です。◇今年はジョイント企画が多くなりそうな気配 ◇短期派遣研究員作道を迎えて、当センターも11月いっぱい出力増強で業務にあたります。(巻)

お願い

本号の宛先(住所、名前)がローマ字になっている方は、漢字表記をお知らせください。

⑥

Hukutana No. 11

Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi
 Issued: 31st July 1999; Editor: MAKISHIMA, Haruyuki
 Publisher: JSPS Research Station, Nairobi
 Printer: Jarolin Enterprises, Nairobi

For rights of reproduction, application should be made to the JSPS Research Station, Nairobi. The views expressed in the articles of this bulletin are those of the contributors and do not necessarily reflect the views of Japan Society for the Promotion of Science.

ふくたな◇第11号

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュース
 発行日◇1999年7月31日 | 編集・発行者◇巻島美幸
 発行所◇日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡下さい。本誌の中で署名のある記事についてはそれぞれの主要・意見は執筆者個人のものです。

© 1999 Japan Society for the Promotion of Science, Research Station, Nairobi. All rights reserved.

P. O. Box 14958, Nairobi, KENYA Phone: +254-2-442424; Fax: +254-2-442112; e-mail: jsp@swiftkenya.com

Japan Society for the Promotion of Science,
 Nairobi Research Station
 P. O. Box 14958
 Nairobi, KENYA

PAR AVION
 VIA AIR MAIL